

星の文藝欄

流星と天狗

(これは考證的な雜文です。)

稻垣武五

天狗などと言ふ天文學とは凡そ縁のないやうな怪物を持出すが、それが流星と關係してゐる所を天文横道戯語として少し書く。

今時天狗の存在を肯定する者はないが、山伏姿で口は尖り鼻高く翅があり、團扇を持つて翔け歩く——これが文獻、傳説、口碑等に現はれる代表的な「天狗様」の形相である。また鞍馬で牛若丸の劍術の稽古臺になつた貧弱なものもある。が、天狗の原始的形態(?)はこんな立派なものではなかつた。

發生地たる支那の「史記」「晉書」「漢書天文志」その他から拾つてみる。まづ、「流星有_レ光見_レ人面_→、墜有_レ聲、若有_レ足曰_二天狗_一……………」¹「西北有_二三大星_→、名曰_二天狗_一、天狗出則人相食_→」²「星出、其狀赤白有_レ光、下野爲_二天狗_一」などによると天狗は流星又は星であつて、「天狗狀如_二大奔星_→、有_レ聲、其下止_レ地類_二狗_一」³「天狗狀如_二大流星_→、色黃有_レ聲……………」⁴「天狗如_二大流星_→、有_レ聲、見則破_レ軍殺_レ將_→」などに依れば天狗は流星に似てゐるのであつて、皆音聲を發してゐる。何れにしてもその様子は一寸人間面をした狗の様で、頭は尖り、喙があるそふだ。これは日本の木葉天狗に似てゐるが、これが出ると大抵は「破_レ軍殺_レ將_→」とありすさまじい描寫がしてある。ひどいものになると、「天門山有_二赤犬_一名曰_二天狗_一、其光飛_レ天流而爲_二星_一、其聲如_二雷_一」又は、「流而爲_二星長數十丈_一」なんて天狗の流星化もあるし、「太白星散爲_二天狗_一」⁵といふ惡戯けた(?)のものもある。

次に日本では、猿田彦命が天狗の姿をしてゐられるが、これは後世になつてその姿を天狗化されたのであつて、吾國最古の記録は今から凡そ一三九〇年前舒明帝の御代の「九年二月戊寅、大星從_二東落_一西、便有_レ聲似_二雷_一、時人曰_二流星之音_一、亦曰_二地雷_一、於是僧旻曰、非_二流星_一是天狗也、其吠聲似_二雷_一」

耳¹である。果してこの年に東夷の亂が起り、征討に赴いた上毛野君形名は敗れたが、その妻女が女軍によつて東夷を破つたさうだ、これを豫言した僧^{ビンノ}髪は舒明帝四年に渡來した支那坊主で、「時人曰^{ホウシ}流星之音」にも拘らず支那式に天狗であると言つた。こゝに日本へも天狗なる怪物が輸入された譯である。尤も日本では初め天狗を阿麻都伎都禰^{アマツキツネ}と訓じさせてゐて、こゝに天狗と狐との交渉もあるのである。

天狗が東洋殊に支那、日本にだけあるのは佛教との關聯に於いて説く必要があるが、何れにしても古代人が流星を怪物の飛天としたのや、妖怪と無氣味な流星を關聯させたのは尤ものことである。またそれは災害、惡事の豫言者でもあつた。

日本ではその後、天狗は流星と關係を絶つて、鎌倉及び室町時代から漸次に、日本獨特の形態に於て傳説化されて居つた。即ち吾々が幼時に聞かされた謂ゆる「天狗様」傳説は流星とは毫も關係なく、また支那古書のそれとは同名異物になつてゐる。例へば、山伏姿で高鼻といふ恰好は狩野元信の畫筆になつたものらしいとのことである。この外の興味多い天狗漫筆は天文學と無關係なる故に省く。

—— 以上 ——

詩 (Poem) 二 篇

稻垣武五

星 圖

ソコデハ神話ノ英雄ヤ動物達ハ

化學構造式ニ似タ骨骼ヲシテキル

.....

徽ノヤウナ色々ノ符號ヲ暗誦スルト

等隔ノ經緯線ハ硝子窓ノ枠ニナル

.....

赤イ印刷ハ麻疹ノ見舞文デハナイ